

Performing Whiteness: Racial Representations in Selected Works of William Faulkner

松下, 紗耶

<https://hdl.handle.net/2324/7182269>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 松下 紗耶

論 文 名 : Performing Whiteness: Racial Representations in Selected Works
of William Faulkner

(「白さを演じる—ウィリアム・フォークナー作品における人種表
象」)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ウィリアム・フォークナー作品における白人性に注目し、白人という人種を構築する過程をパフォーマンスとして考えることで、フォークナーが白人性をどのように捉えていたのかを検討する。アメリカにおける人種ポリティクスを踏まえると、フォークナーの時代において、人種とは生物学的なものではなく、社会的・文化的事項に基づく構築主義的なものであることに人々は気づき始めていたことが分かる。当時の人種分離は白人の恣意的なものであり、白人は黒人を人種的他者だと位置づける一方、社会規範に従って「白人らしく」ふるまうことで、その白人性を獲得するのである。本論文では、人種のパフォーマンスを、自らの人種的アイデンティティを構築しようとする、または対象人物に人種的アイデンティティを与えようとする言葉、態度、行動として定義し、パフォーマンスによって白人性が構築されていくことを示す。

また一方で、経済的困窮や人種混淆といった要因によって、そのホワイトネスを「正しく」構築することができず、不完全な白人性を表象してしまうケースにも注目しなければならない。そのパフォーマンスの不完全さに、白人意識に深くこびりつく「白人でいること」への執着、または困惑や葛藤などを読み取ることができる。人種パフォーマンスを明らかにすることは、これまで一般的だと解釈され、批評の対象とならなかった要素がパフォーマンスである可能性を提示することとなる。本研究は、人種パフォーマンスによってつくりあげられたものや、意図的に隠蔽されているものをあぶり出し、そこに潜む新たな解釈の可能性を提示する。

移民で成り立つアメリカでは、人種概念は流動的である。第1章では、「乾燥の九月」に登場する、黒人のリンチを先導するジョン・マクレンドンを通して、アメリカにおける人種ポリティクスを検討し、白人性の不安定さと白人の抱える人種不安を明らかにする。かつて白人のヒエラルキーの最下層に置かれた、アイルランド系のファミリーネームを持つマクレンドンの

リンチは、黒人を人種的他者とみなすことで自らの白人性を担保しようとするパフォーマンスなのである。また、黒人男性によるレイプを捏造したと解釈されてきたミニー・クーパーを読み直すことで、彼女の主体はむしろ、彼女を白人女性としてまなざす暴力的な視線によって作り上げられるものであることを明らかにする。つまり、人種とは自らの人種パフォーマンスで獲得することができる一方で、共同体から向けられる視線によって左右されるものでもある。第2章では『八月の光』に焦点を当て、ジョアナ・バーデンによるバーデン一族の話を精査することで、これまで指摘されていなかった彼女の人種不安を明らかにする。ジョアナによるジョー・クリスマス黒人化は、「黒っぽい血」を持つと語られるバーデン一族のひとりであるジョアナが、南部共同体内の人種言説において人種的他者とならないための人種パフォーマンスなのである。第3章では、『アブサロム、アブサロム！』を扱い、プアホワイトという出自を持つトマス・サトペンの、大邸宅や奴隷、白人の家族を手に入れることによって南部白人性を獲得しようとする人種パフォーマンスを精査する。以上の研究は、フォークナーが白人性の不安定さにいち早く気付いており、空白のカテゴリーとみなされていた白人性を人種化したことを明らかにする。

フォークナーは『アブサロム、アブサロム！』以降、彼と同じく南部貴族の家庭に生まれた白人男性たちの黒人との個人的な体験を通して、彼らが自らの人種意識と南部規範の間にある乖離、つまり、自らの抱える不安定な白人性を認識する過程を描きだす。本論文では、第3章においてクエンティン・コンプソンによるサトペン物語の再構築に表れる黒人表象に着目し、黒人女性とのグロテスクなセクシュアリティとの出会いが、クエンティンが内面化していた人種混淆に対する恐怖の一因である可能性を提示する。第4章では、『行け、モーセ』において、これまで批評の中心として扱われることのなかったロス・エドモンズに着目し、ロスとビーチャム一家との関係性を検討することで、ロスが抱える人種不安と黒人への欲望（愛情）に気付く過程を探る。第5章では、これまで過小評価されてきた『墓地への侵入者』を読み直す。自律的な黒人であるルーカス・ビーチャムとの出会いによって人種に対する新たな視座を獲得したチック・マリソンに着目し、彼の南部規範を逸脱する身体的パフォーマンスは、白人の優越的立場を揺らがすものであることを検討する。また、最終的に南部白人性を受け入れるチックからは、フォークナー自身の白人性における葛藤とともに、自己批判を含めた風刺的姿勢を発見することができる。本研究は、フォークナーは一貫して自らの白人性を内省的に捉えており、その不安定さに向き合い続けた作家であることを明らかにする。